

## 水戸久昌寺の開創について

### はじめに

江戸幕府は宗教界をも例外なく幕藩体制の中に組み入れられるべく宗教統制の政策を押し進め、懸案であったキリスト教禁教策として慶長十七（一六一二）年幕府直轄領にキリスト教禁止令、翌年にはそれを全国に公布した。更に、キリシタン摘発のために寺請制度、檀家制度を設けて、民衆をも封建社会の中に組み込む政策をとりいれていった。

仏教教団にもさまざまの手段を用いて統制を加え、新寺建立禁止令<sup>1</sup>、寺院法度の制定<sup>2</sup>、などの政策をとりいれていった。

幕府の宗教行政はその当初は金地院崇伝が担当していたが、彼の没後、寛永十二（一六三五）年十一月に幕府および各藩に寺社奉行を設け<sup>3</sup>、これが宗教行政を司る機

佐々博史

関となった。この寺社奉行から命令を受けて配下の寺院に伝達する機関が触頭<sup>ふれがしら</sup>である。幕府の命令を受ける触頭は、各宗派とも江戸在中の有力寺院であった。この江戸在中の触頭寺院が受けた幕命を、各国においてそれぞれ所属の寺院に伝達する地方の触頭がおかれ、これは藩の寺社奉行の命令をも伝達した。触頭は上からの命令を下に伝える一方的機関であったのではなく、寺院から寺社奉行へ各種の提出願書等も申達する役目を果たしていた。従来、幕府の仏教教団の統制のため本山、本寺から末寺への連絡伝達組織として本末制度があった。しかし本末制度の淵源は遠く古代・中世までに遡り、各門流に基づいて構成された法流の師弟関係によって成立している。したがってそれは地域に限らず、時には数カ国にもわたる支配形態を構成していたため、一国一領主という幕藩

体制においては、そうした組織形態では相容れない点が出来てそぐわない為、一国あるいは一地方を限る同宗派寺院の統制支配組織である触頭制が発生したと指摘されている。<sup>4)</sup>

このような本末制度、それを覆う触頭制度が、仏教教団の幕藩体制に組み入れられていった具体像である。

江戸時代の教団の制度は、各宗派ともそれ以前に成立した本末制度を基礎に構築されたが、幕藩体制が強化されるにつれて各宗派では従来の本末制度よりも触頭制度が次第に重視されてくるようになる。日蓮宗においても、触頭制度により江戸在中の有力寺院が役寺（触頭）となった。日蓮宗の諸本山の中で、一派として幕府から公認され、江戸に触頭を有していたのは次の如くである。

身延派	本山		住所	江戸役寺
	身延久遠寺	下谷	宗延寺	
本門寺派	池上本門寺	下谷	善立寺	
	〃	谷中	瑞輪寺	
本圀寺派	京都本圀寺	二本榎	承教寺	
	〃	二本榎	朗惺寺	
	谷中	宗林寺		
	浅草	幸龍寺		

本成寺派	京都本圀寺	本所	法恩寺
越後本成寺	丸山	本妙寺	
〃	芝	長応寺	
妙満寺派	京都妙満寺	品川	妙国寺
〃	品川	本光寺	
〃	浅草	慶印寺	
中山派	中山法華経寺	谷中	妙法寺
久昌寺派	水戸久昌寺	駒込	大乘寺

一致派では身延久遠寺・池上本門寺・京都本圀寺・中山法華経寺・水戸久昌寺の五本山、勝劣派では越後本成寺・京都妙満寺の二本山である。ここに掲げた各本山は久昌寺を除いて中世以来の門流の拠点として、位置づけられる寺院であり、特に身延・池上・中山は一致派教団の勢力を三分するふさわしい寺院である。一方、久昌寺は上述した各本山のような歴史的背景を有していないにもかかわらず一派本山となり、江戸に役寺も設置していたのである。このような観点に立つとき、水戸久昌寺の存在はきわめて特異な存在といわざるをえない。いうまでもなく、久昌寺を除く各本山の開創や歴史については数多の研究蓄積がある。しかし、久昌寺についてみるならば、

その開創の経緯や発展過程を考究したものは少ないように考えられる。<sup>6</sup>そこで、本稿では、近世日蓮宗における教団制度研究へのアプローチを念頭におきつつ久昌寺の開創過程について、考察してみたい。

本稿で論ずるにあたっては、主として「山吹日記」<sup>7</sup>、「桃源遺事」<sup>8</sup>、「水雲集」<sup>9</sup>、「久昌寺記」<sup>10</sup>を中心としてみていきたい。

### 一、久昌寺の淵源と開創

水戸久昌寺は「夫当山者本藩二世源義公為先妣所草創也先妣諱久子谷氏也」<sup>11</sup>と徳川光圀（一六二八—七〇〇〇）が生母久昌院追善菩提のために建立した寺院である。光圀の生母久昌院（一六〇四—六一）は谷左馬之介藤原重則の女<sup>12</sup>で徳川頼房（徳川家康の子）の側室、頼房の生母お方の方（養珠院夫人）の感化に依り同じく熱心な法華信者であった。久昌院は、

深大山経王寺が住持日忠聖人説法教諭夫人婦<sup>13</sup>依<sup>レ</sup>之深信<sup>レ</sup>当宗<sup>レ</sup>唱題誦経夙夜不懈<sup>レ</sup>

とあるように、禅那院日忠（一六六〇）の化導により、深く法華信仰に導かれ、唱題誦経日夜怠ることなかったという。また、久昌院は、当時不受不施の疑いをうけ安

居の地を失っていた日忠を守護し、水戸城下に一字を建立して深大山禅那院経王寺と称した。この水戸の経王寺が、久昌寺の前身である。後に、徳川光圀は母久昌院が帰依していた日忠の遺烈を崇いで、久昌寺建立の際には、開山に仰いでいる。<sup>14</sup>

寛永元（一六六一）年十一月十四日に久昌院が逝去すると、<sup>15</sup>光圀は遺骸を経王寺に葬った。

延宝元（一六七三）年、十三回忌のみぎり光圀は母久昌院の為に一寺建立を思い立ち、数年の歳月を費やし延宝五（一六七七）年に唐風七堂伽藍<sup>16</sup>の寺院を建立し、母の法号、諡号<sup>18</sup>にちなんで、靖定山妙法華院久昌寺と称した。

「久昌寺記」によれば、久昌寺の建立は、

移<sup>レ</sup>久昌寺久慈郡稲木村<sup>レ</sup>土木経営始<sup>レ</sup>延宝乙卯歳<sup>レ</sup>至<sup>レ</sup>丁巳歳<sup>レ</sup>伽藍落成<sup>レ</sup>

とあり、乙卯歳に土木工事がはじまったと記されている。乙卯の年とは延宝三年、丁巳とは延宝五年。約三年間の歳月をかけ、久昌寺が稲木村に創建されたといえる。

「水雲集」にも、

稲木之山麗秀也太守創<sup>レ</sup>精舎<sup>レ</sup>於此山<sup>レ</sup>曰<sup>レ</sup>久昌寺<sup>レ</sup>蓋<sup>レ</sup>資<sup>レ</sup>頭妣靖定夫人冥福<sup>レ</sup>也凡<sup>レ</sup>歴<sup>レ</sup>三年<sup>レ</sup>土木之功成<sup>レ</sup>

と記されるところである。これらの資料によれば、久昌寺は延宝五年に稲木村に開創されたことが知られる。<sup>21</sup>光圀は久昌寺の前身である水戸向井町の経王寺を久慈郡稲木へ移転し、靖定山妙法華院久昌寺を建立したのである。当時人々はこの寺を「山の御寺」と呼んだ。<sup>22</sup>

そもそも稲木村の久昌寺が建てられた地には、もと佐竹家十三代義仁が建立した天徳寺があった。それについて「久昌寺記」の中に、

昔禅宗天徳寺在<sub>レ</sub>此而移<sub>レ</sub>之<sub>二</sub>千川和田<sub>一</sub>其跡建<sub>二</sub>当寺<sub>一</sub>也<sup>23</sup>

とある。

佐竹家十三代義仁の夫人が応仁元（一四六七）年十二月、六十八歳で亡くなると、義仁は夫人の冥福を祈るため、この地に天徳寺を建立。そして二十代佐竹義宣が、水戸入城と同時に水戸松本町、現在の祇園寺の所に移し建てられたが、秋田へ国替の際更に秋田へ移された。その後この地に光圀が久昌寺を建立するのであるが、それまで廃寺となった天徳寺の堂宇が残っていたという。<sup>24</sup>

延宝五年十一月には、

延宝丁巳歲十一月十四日大姉十七回忌始行<sub>二</sub>大法会<sub>一</sub>也<sup>25</sup>

と久昌院の十七回忌の法要並びに久昌寺落慶法要が盛大に修せられた。

開山法要の模様については、「山吹日記」によると、

此の御寺に今日より十四日まで読誦、音楽、八講、散花、頓写、懺法、訓読、薪供、行道、論義、十種の供養、施餓鬼、放生、説法、等もろくの大法会を修行せらるる事、高祖の出世の時と雖も、如是く法事ある事を聞かず<sup>26</sup>

とあり、「水雲集」にも、

自<sub>二</sub>七日<sub>一</sub>至<sub>二</sub>十三日<sub>一</sub>次第<sub>二</sub>勤<sub>一</sub>修<sub>二</sub>於<sub>レ</sub>読誦<sub>一</sub>八講書写懺法訓読薪水供養十種供養等<sub>二</sub>凡<sub>レ</sub>七箇法会<sub>一</sub>以<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>莊嚴<sup>27</sup>

とあり、さまざまの供養が盛大に営まれたことがうかがわれる。

この時大導師は

既になつて使を、甲州身延山に遣はし、久遠寺の住持日通上人を招き法華の導師とせらる。<sup>28</sup>

と身延久遠寺三十世寂遠院日通（一六一四〜七九）であった。岩本実相寺十五世知足院日進<sup>29</sup>（一六九八）も「殿に入る導師は日進上人なり」と光圀に請せられ務めていた。<sup>30</sup>



それぞれの堂宇についてみると、まず多宝塔については、

多宝塔に釈迦、多宝の二尊を安置し<sup>(35)</sup>

とあり、釈迦・多宝二仏を奉安していたことが知られる（「久昌寺記」には「多宝塔安<sup>三</sup>二宝」とある）。

次に聚石堂とは、

聚石堂には中央に高祖日蓮の霊像<sup>(36)</sup>

聚石堂安<sup>三</sup>祖師也<sup>(37)</sup>

とあるように、日蓮聖人を奉安した祖師堂である。「山吹日記」によれば、この久昌寺の聚石堂（祖師堂）の祖師像は、

聚石堂には中央に高祖日蓮の霊像を池上の本門寺より求めうつつして、工の妙術をつくさせ是を安置せり<sup>(38)</sup>

と池上本門寺の日蓮聖人の霊像を模倣して作らせたことが記されている。

位牌堂には、

位牌堂奉<sup>三</sup>安大姉神牌<sup>(39)</sup>

と大姉（久昌院）の位牌が安置されていた。

経王宝殿には、

経王宝殿額嗣君肅公所筆也<sup>(40)</sup>

と「経王宝殿」の額が肅公（徳川綱條<sup>つなえだ</sup>）筆によって掲げ

られた。経王宝殿のなかには、久昌寺の本尊「法華経宝塔」がある<sup>(42)</sup>。その外観については、

中にも経王宝殿と額を記されるに中を見るに釈迦なく多宝も見えず、四菩薩もなし、只ひとり妙法蓮華の堂々として、殿内に安座せるあり<sup>(43)</sup>

と、釈迦多宝の二仏や四菩薩もなく、ただ法華経の宝塔のみが堂々として、殿内に安置されている様子が記されている。この「法華経宝塔」の表面の題目は、

表に高祖日蓮の自筆の名号をうつし<sup>(44)</sup>

と日蓮聖人自筆を写したものであった。この自筆は、表には祖師日蓮大菩薩の自筆を中山法華経寺よりかり求めて名譽の工に命じて筆墨の運行ありの俛にうつし奉りて<sup>(45)</sup>

と中山法華経寺<sup>(46)</sup>よりかり求めたもので、その運筆も全く同じように写したことがわかる。

法華経宝塔本尊の中には、光圀自筆の法華経が納められている。

これは光圀が江戸駒込邸において延宝五（一六七七）年猛暑の中、七月十八日から八月二十三日（二十二日）まで約一か月間、潔斎の上衣冠を召し、一字を書きたびに三回礼拝し法華経開結十巻の文字八万三九九二の文字

を薄い桎まさいた板に書き、これを積み重ねて箱に納め、その上を黒漆で塗り、日蓮聖人の自筆の題目を写し取って箱の上に彫うらせたものである。<sup>47</sup>

また、宝塔の最下部の蓮華台の中には、光圀と母久昌院との髪の毛を堅く結び合わせて納めており、未来永劫母子共に靈山の契りを誓った孝心の程が伺える。

さらに上掲の伽藍の表の他に、久昌寺には経蔵が建てられた。その経蔵には、

一切経者明、渡来之本也<sup>48</sup>

と中国の明で印刷された「大蔵経」(明版)を奉納した。そして、各冊の第一丁(第一ページ)に「久昌寺経蔵開山檀那源光圀置」の印が押捺おされている。<sup>49</sup>

### 三、支院・末寺と寺領

久昌寺は、七堂伽藍の他に坊・末寺・檀林等を附属した。

坊には摩訶ま訶か衍えん庵あんと、その他に十坊が知られる。十坊とは、『諸檀林並親師法縁』によれば玄眞院・玄収院・見了院・觀厚院・通妙院・勝圓院・俊靜院・通巖院・泰善院・是達院である。<sup>51</sup> また、天明六(一七八六)年の「法華宗久昌寺派下寺院本末帳」<sup>52</sup>には玄厚院・玄収院・

見了院・勸孝坊・通妙坊・勝圓坊・俊靜坊・通巖坊・泰善坊・是達坊とあって、若干の相異があるようである。

このうち摩訶訶衍庵は久昌寺の寺務一切を総管し、

摩訶訶衍庵四字義公所筆也<sup>53</sup>

と光圀自ら命名し、扁額を書いてこれを掲げた。<sup>54</sup> 摩訶訶庵の住持には、草山元政の弟子、皆如院日乘(一六四八—一七〇三)を京より招いている。<sup>55</sup>

久昌寺の末寺には、

付三田三百石為三寺料新籍属八箇寺之謂末寺<sup>56</sup>

と八ヶ寺が附属されている。この八ヶ寺については文献により異同があり一定していない。

「法華宗久昌寺派下寺院本末牒」には<sup>57</sup>

武州江戸駒込 十行山 大乘寺

武州江戸杰猿江 立野山 慈眼寺

常州那珂郡市毛村 一乗山 無二亦寺

常州茨城郡松山村 本曾山 妙蓮寺

常州多珂郡赤浜村 松塚山 願成寺

常州多珂郡成沢村 大高山 宝塔寺

常州久慈郡中利員村 開曾山 常寂光寺

常州久慈郡新宿村 頭具山 漫茶羅寺

と八ヶ寺あげられている。

『日乗上人日記』の元禄十二年九月二十六日条には、<sup>58)</sup>

一、末寺衆今度被仰付衆座牌ノ義。一、妙蓮寺、二、願成寺、三、宝塔寺、四、寂光寺、五、曼荼羅寺也。

とあり、久昌寺末寺として、妙蓮寺、願成寺、宝塔寺、寂光寺、曼荼羅寺の五ヶ寺があげられている。また、元禄十四年十一月十四日の『日乗上人日記』には<sup>59)</sup>

其外末山無二亦寺、妙蓮寺、願成寺、宝塔寺、寂光寺、曼荼羅寺也。

とあり、前掲の五ヶ寺のうち、寂光寺を除いて、無二亦寺が加えられている。

『新訂了義院日達上人正伝』には久昌寺末寺として、常寂光寺・真浄寺・宝塔寺・願成寺・無二亦寺・大乘寺・慈眼寺の七ヶ寺があげられている。<sup>60)</sup>

『水戸黄門光圀卿山の御寺久昌寺文献集』では、常寂光寺・真浄寺・宝塔寺・願成寺・無二亦寺・妙蓮寺・曼荼羅寺・恵日庵の八ヶ寺があげられている。<sup>61)</sup>

そこで上掲の資料・文献によって久昌寺の末寺についてまとめてみると、次表のようになる。

法華宗久昌寺派 下寺院本末牒	日乗上人日記	新訂了義院日達 上人正伝	水戸黄門光圀卿山の 御寺久昌寺文献集
大乘寺		大乘寺	
慈眼寺		慈眼寺	
無二亦寺	無二亦寺	無二亦寺	無二亦寺
妙蓮寺	妙蓮寺		妙蓮寺
願成寺	願成寺	願成寺	願成寺
宝塔寺	宝塔寺	宝塔寺	宝塔寺
常寂光寺	寂光寺	常寂光寺	常寂光寺
曼荼羅寺	曼荼羅寺		
		真浄寺	真浄寺
			恵日庵

ところで、久昌寺の寺領についてみると、「久昌寺記」には、

伽藍落成山号靖定乃以謚付田三百石為寺料<sup>62)</sup>

とあり、寺領三百石を有していた。当時の水戸藩の寺院における寺領は、「水戸諸寺御朱印検地帳」によって知ることができる。<sup>63)</sup> この史料によれば、寺領三百石持ちの寺院は、願入寺（一向宗）と久昌寺（日蓮宗）の二か寺。百五十石は清音寺（臨濟宗）の二か寺。百石は正宗寺（臨濟宗）と常福寺（浄土宗）の二か寺。六十石は耕山



寺（曹洞宗）と蓮覚寺（真言宗）の二か寺。五十石は神崎寺（真言宗）、薬王院（天台宗）、心光寺（浄土宗）、蓮華寺（日蓮宗）、天徳寺（曹洞宗）の五か寺。以下四十石一か寺、三十石四か寺、二十四石一か寺、二十石四か寺、十七石一か寺、十五石六か寺、十二石二か寺、十石十か寺、八石二か寺、五石一か寺である。<sup>64</sup>

久昌寺は願入寺と並び領内最大の寺領三百石を有していたのであり、当時の規模の大きさがわかる。

このように整えられた寺の外観は荘麗極まりなく、大中院日孝（一六四二〜一七〇八）をして

稲木之山麗秀也太守創精舎於此山<sup>65</sup>

といわせ、廻りの景色とも相まって寺の規模も壮大充実、麗しい外観であったと推察される。「水雲集」には、次のような詩文がみられる。

西山眺望呈常山公<sup>66</sup>

西山眺望興無窮 地勢天然似洛中

田渡嶺如將軍頂 高鈴嶺是四明峰

稲木旋與嵯峨比 精舎全兼衣笠同

君若要看都下美 常陽城北太田東<sup>66</sup>

この詩文は、大中院日孝が久昌寺附近の風景について絶賛したものである。

また、外観絶景だけではなく、久昌寺には多くの日蓮聖人関係の宝物が納められていた。記録には、

祖師真筆法華經、曼荼羅、書翰等、其余古筆、古佛像、和漢名品、不可枚挙<sup>67</sup>矣

とあり、当時の久昌寺の隆盛が偲ばれる。

おわりに

以上、考察したように久昌寺は淵源を水戸の経王寺とし、延宝五年に光圀が生母久昌院追善菩薩提の為、稲木村に約三ヶ年の歳月をかけ開創されたことが確認できる。久昌寺の伽藍は七堂伽藍が完備され、支院については摩訶衍庵をはじめとする十坊を附属、末寺は八ヶ寺を附属し、久昌寺は独立本山としての風格を整えていった。久昌寺の寺領についても、当時の水戸藩内で三百石の寺領を有し藩内最大の寺院であった。当時の幕府の仏教教団政策を考慮するならば、こうした久昌寺の開創過程は、きわめて特異なものであることがあらためて指摘できる。なお、光圀没後の久昌寺の展開については今後の研究課題としたい。

註

- (1) 伊達光実著『日本宗教制度史料類聚考』（昭和四十九年六月、臨川書店）二四六頁参照。
- (2) 慶長六（一六〇一）年、各宗派へ寺院法度を発令。寺院法度は家康が寺院を経済的、政治的に規制する目的で慶長六年、高野山（真言宗）にたいして發布され、以後諸宗に元和元（一六一五）年まで続いた。真言宗、天台宗、が多く、浄土宗、臨濟宗、曹洞宗の順に多い。しかし、元和元年までの段階では、一向宗・日蓮宗に対して法度は制定されていない。これは一向宗・日蓮宗の宗派に統制をくわえようとするそれら信者らの（一向一揆や不受不施派の例がある為）反発があり手のつけにくい状態であったからである。日蓮宗には元和二（一六一六）年十一月、身延山に宛てて法度が出され、本寺と末寺との関係が厳しく規定された。梅田義彦著『改訂増補日本宗教制度史〈近世編〉』（昭和四十七年十一月、東宣出版）など参照。
- (3) 新訂増補国史大系第三十九卷『徳川実紀』第二篇（昭和五年四月、吉川弘文館）六九二〜三頁。圭室文雄氏は「これは寺院行政の前身を意味するもので、ここにおいてはじめて、幕藩体制は本格的宗教行政へ移行することができた。」と寺社奉行設置の意義について述べている。（圭室文雄著『江戸幕府の宗教統制』）
- (4) 宇高良哲稿「諸宗江戸触頭成立年次考」（『大正大学研究紀要』六十八号）
- (5) 宇高良哲稿「諸宗江戸触頭成立年次考」（『大正大学研究紀要』六十八号）「諸宗江戸触頭一覽表」の表を参考として若干の修正を加えた。
- (6) 水戸久昌寺に関する著述としては、松森靈運著『日蓮主義の妙趣』（大正八年七月）、豊田重光著『西山余光』（昭和十二年十月）、『水戸市史』中巻（昭和四十三年八月）、影山堯雄著『日蓮宗布教の研究』（昭和五十年二月）、『常陸太田市史』通史編上（昭和五十九年三月）などがある。
- (7) 延宝五年十一月の稲木村の久昌寺落慶法要並びに久昌院十七回忌の法要の式典を詳細に記述した資料。筆者は不詳。
- (8) 光圀の家臣、三木之幹等により編述された。全五巻。
- (9) 大中院日孝著。全二巻。その弟子、慈善院日心が編集する。享保九年刊。
- (10) 『水戸黄門光圀卿山の御寺久昌寺文献集』によれば、遠妙院智海日竟（一八〇八）の記述とある。
- (11) 「久昌寺記」（『水戸黄門光圀卿山の御寺久昌寺文献集』）以下「久昌寺記」は同書により、「久昌寺記」〇〇頁と略す。
- (12) 久昌院の生涯については、星野日亮「孝子水戸義公」（『宗報』三十九号、昭和二十八年三月）六〜七頁。高橋佳豊「尊い法体となられた水戸公とその母法華信仰」（『日蓮宗新聞』昭和三十五年十二月二十日号二頁）を参照。
- (13) 「久昌寺記」三十六頁
- (14) 「常陽候源黄門光圀卿為萱堂靖定夫人造久昌寺」崇

師遺烈<sup>ヲ</sup>仰<sup>テ</sup>為<sup>シ</sup>開山祖<sup>ト</sup>也」(『本化別頭仏祖統紀』四二六頁)。  
禪那院日忠は身延久遠寺十七世慈雲院日新の弟子で日新寂  
後、心性院日遠の門下。京都頂妙寺六世、中山法華経寺二  
十世等を歴任する。

- (15) 「寛文元年辛丑十一月十四日感<sup>ラ</sup>疾<sup>ヲ</sup>泊<sup>シテ</sup>然<sup>ル</sup>而<sup>シテ</sup>逝<sup>ス</sup>」(『本化別頭  
仏祖統紀』五三七頁)、「十一月十四日水戸久昌夫人逝」  
『本圀寺年譜』卷十)、「十一月十四日、所生谷氏卒。葬<sup>シ</sup>  
千久昌寺。奉<sup>レ</sup>諡<sup>曰</sup>靖定夫人。」(『水戸義公年譜』二九  
三頁)。

- (16) 後、久昌院の墓は延宝五年十一月に瑞竜山へ遷される  
〔山吹日記〕。

- (17) 七堂伽藍とは堂宇が具備している寺の意で、七は数量で  
はなく、内容も一定していない。宗派によって種類も名称  
も異にしている(中村元監修『新仏教辞典』誠信書房)。

- (18) 法号を久昌院心周<sup>にちいん</sup>日勻大姉という。諡号は靖定<sup>せいてい</sup>夫人。

- (19) 「久昌寺記」三三六頁

- (20) 「水雲集」乾之卷

- (21) なお、久昌寺の開創については、『本圀寺年譜』巻十に  
は「延宝元年癸丑(中略)水戸候光圀卿靖定山久昌寺建立  
〔日蓮教学研究紀要〕十八号二二二頁)と延宝元年建立  
とある。

- (22) 豊田重光著『西山余光』

- (23) 「久昌寺記」三三七頁

- (24) 森田弘道著『常陸太田の史跡と伝説』(昭和六十二年九

月、筑波書林)

- (25) 「久昌寺記」三十八頁

- (26) 「山吹日記」(『水戸黄門光圀卿山の御寺久昌寺文献集』  
十四頁)。以下「山吹日記」は同書により、「山吹日記」○  
○頁と略す。

- (27) 「水雲集」乾之卷

- (28) 「山吹日記」六頁。此の縁故によって寂遠院日通を久昌  
寺中興と崇めた。

- (29) 知足院日進は岩本実相寺歴代の中興と称されている。

- (30) 「山吹日記」十六頁

- (31) 「山吹日記」五頁

- (32) 「桃源遺事」卷之三(『徳川光圀関係史料水戸義公傳記逸  
話集』一二九頁)。以下「桃源遺事」は同書により「桃源  
遺事」○○頁と略す。

- (33) 「水雲集」乾之卷

- (34) 「久昌寺記」三三七頁

- (35) 「山吹日記」六頁

- (36) 「山吹日記」六頁

- (37) 「久昌寺記」三三七頁

- (38) 「山吹日記」六頁

- (39) 「久昌寺記」三三七頁

- (40) 「久昌寺記」三三七頁

- (41) 肅公とは徳川綱條の諡<sup>おくりな</sup>である。

- (42) 『日蓮宗新聞』平成二年八月十日号四頁参照。

- (43) 「山吹日記」十四頁
- (44) 「山吹日記」十四頁
- (45) 「山吹日記」六頁
- (46) 中山法華経寺では、日常の代より日蓮聖人の御書や消息等は寺外の持ち出しを禁止し、寺内において閲覧すべくこゝとが命じられていた(「常修院本尊聖教事」置文(『日蓮宗宗学全書』一巻上聖部一八九頁))。
- (47) 「桃源遺事」二二九頁。「山吹日記」六、十四頁。「久昌寺記」三十七頁。「常山文集」卷之十九(『水戸義公全集』上一九三頁)。
- (48) 「久昌寺記」三十七頁
- (49) 『水戸市史』中巻(一)八八一頁
- (50) 摩訶衍とは梵語で「大乘」と訳す。
- (51) 諸檀林並親師法縁刊行会『諸檀林並親師法縁』(昭和四十二年五月)一九六頁
- (52) 『江戸幕府寺院本末帳集成』(昭和五十六年十一月、雄山閣)二七二九頁
- (53) 「久昌寺記」三十七頁
- (54) 「摩訶衍庵」の扁額は光圀が皆如院日乗の為に直書し、太田九藏が彫刻したものである。
- (55) 光圀は、当初草山元政の招来を願っていたが元政が寂した為、その弟子である日乗を迎えた。
- (56) 「久昌寺記」三十七頁
- (57) 『江戸幕府寺院本末帳集成』二七二九―二七三〇頁
- (58) 稲垣国三郎編『日乗上人日記』(昭和二十九年七月、日乗上人日記刊行会)七五三頁
- (59) 『日乗上人日記』九七〇頁
- (60) 寶田日雄著『新訂了義院日達上人正伝』(昭和六十三年十月)十一頁
- (61) 山岡日建編『水戸黄門光圀卿山の御寺久昌寺文献集』(昭和四十一年二月)三十七頁
- (62) 「久昌寺記」三十七頁
- (63) 宝永六(一七〇九)年から正徳二(一七二二)年の間に藩が作成した。
- (64) 『水戸市史』中巻(一)八九〇頁参照。
- (65) 「水雲集」乾之卷
- (66) 「水雲集」坤之卷
- (67) 「久昌寺記」三十七頁。『日乗上人日記』五七八、六八一頁。
- 付記 本稿作成にあたり、日蓮教学研究所長浅井円道先生の紹介により、水戸久昌寺様の資料閲覧の便宜を計っていたが、また同寺執事の沖鳳一上人には数多くの御指導、御教示を賜りました。末筆ながら記して感謝いたします。